

## まぐの 作野遺跡

遺跡番号	N o.655
調査回数	第3次
所在地	村山市大字楯岡字笛田
北緯・東経	38度28分34秒・140度24分13秒
調査委託者	村山市
起因事業	徳内・シーボルトライン道路改良事業
調査面積	250㎡
現地調査	平成22年7月5日～8月4日
調査担当者	植松暁彦（現場責任者）・後藤枝里子
調査協力	村山市教育委員会・村山教育事務所
遺跡種別	集落跡
時代	縄文時代
遺構	土坑・柱穴・溝跡・谷跡等
遺物	縄文土器・石器・土偶・石棒・石刀・土冠・勾玉・玉等（文化財認定箱数：60箱）



遺跡位置図（1：50,000）

### 調査の概要

作野遺跡は、大沢川左岸の扇状地扇頂部に位置し、地元周辺においては、古くから土器や石器が採集される地域として知られ、昭和53年（1978年）に正式に遺跡として『山形県遺跡地図』に登録された。

その後、山形大学が、昭和54年（1979年）に宅地造成などに伴いトレンチによる発掘調査を実施し、竪穴住居跡2棟や多量の遺物を発見した。更に、県教育委員会において、昭和57・58年（1982・1983年）に県企業局の送水管工事に伴う面的調査（第1次調査）を行い、

竪穴住居跡2棟と、多量の土器さらに石器を廃棄した「捨場」を発掘した。

これらの成果から、本遺跡は縄文時代終末の縄文時代後期～晩期（約3,000年前）の当地域の拠点的な集落跡として報告され注目された。

平成21年（2009年）に、村山市の市道徳内・シーボルトライン道路改良事業に伴い村山市の委託を受け発掘調査（第2次調査）が行われた。調査区は、第1次調査の東側にほぼ並行する範囲で、遺跡範囲の最も東側の山際に位置し、標高が高く扇状地の最頂部付近にあたる。調査では、縄文時代後・晩期の貯蔵穴群、縄文時代最終末～弥生時代初頭の竪穴住居跡1棟が発見された。遺物は、縄文時代～弥生時代初頭の土器や石器などが多量に出土し、土偶や石棒・石刀、石冠など祭祀具も出土した。

特に縄文時代最終末～弥生時代初頭（約2,300年前）の竪穴住居跡は、県内でも発見例が少なく、出土遺物からは他地域の影響も考えられる土器や石製品も出土し、弥生文化の始まりを知る上で貴重な資料が得られている。

今回の調査は、昨年度の市道徳内・シーボルトライン道路改良事業に付設される市道工事（第3次調査）に伴い、第1次調査の西側にあたる部分の発掘調査を行った。

調査区は、幅約8m×長さ約33mと小規模ながら、調査区南部で縄文時代晩期中～後葉（約2,500年前）の谷跡、調査区中央部～北部の岸辺で同時期の大型の柱穴や土坑、溝跡などが発見された。

特に谷跡からは、多量の縄文土器や石器が出土し、他に祭祀具の土偶や石刀、石棒、土冠、装飾品のヒスイ製の玉など多様な遺物が出土した。また、これら遺物は、谷底から徐々に堆積した大別4層の地層ごとに出土し注目された。

### 遺構と遺物

作野遺跡は、従来の調査から縄文時代終末～弥生時代初頭（約3,000年～約2,300年前）にわたり、長期間営まれた県内でも有数の拠点集落と知られている。

特に谷跡は、幅約4m以上、長さ約6m以上、深さは遺構検出面から約1.5mを測る。東の山裾から西流したことが分かる。

この谷跡からは、洪水などによる堆積土が大別4層（上層・中層・下層・最下層）に分けられ、多量の土器や石器、多様な土偶や石棒・石刀、土冠などの祭祀具、玉類など装飾品が出土した。

これらを古い順に概観すれば、谷底（砂礫）に近い最下層（F4層）では、水の流が推測される砂を含む泥炭層で、土器が一定量出土し、大半が半完形品であった。

その上層（F3層）は、シルト層が最も厚く堆積し、遺物が最も多く出土した。大型の深鉢や鉢が横位・逆位した状態で出土し、当時の廃棄された状況がよく分かり、ほぼ完形品に復元されるものが多く認められた。また、小型の壺や鉢、赤彩された土器などもまとめて出土した。他に土偶や、男性器を模した柄がある石棒や石刀が数10点出土した。男女両性具を表現したとされる土製の突起を有する冠形の土冠（どかん）なども出土した。

中層（F2層）は、下層に比べ遺物量は少ないものの、小～中型の完形の鉢などが複数発見された。新潟県上越市の糸魚川産と考えられるヒスイ製の玉も中～下層からの出土である。なお谷跡は、中層の堆積によりほぼ埋没し、窪地状の低地となっていたようである。

最も上位の上層（F1層）は、砂層で遺物量は全体的に少ない。但し、完形品の注口土器や浅鉢などが散見され窪地状になった谷跡にひきつづき遺物を廃棄していったことがうかがえた。



SG1谷跡の下層の掘り下げ作業風景（南から）\*写真手前に土器群が集中出土

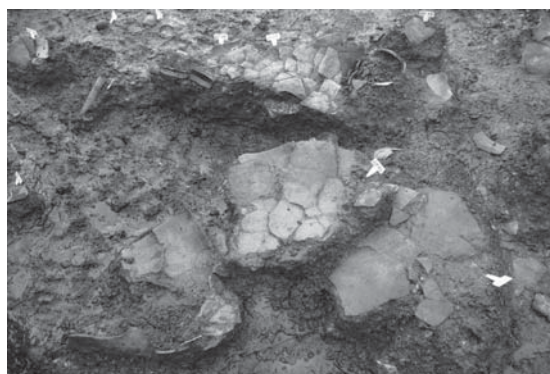




調査区全景（南から）＊写真手前がSG1谷跡



SG1谷跡の上層の掘り下げ作業（南から）



SG1谷跡の下層の遺物出土状況（南から）



SG1谷跡の最下層の遺物出土状況（南から）＊調査説明会

これら出土遺物のうち、文様のある精巧な造作のいわゆる精製土器から年代が推定され、全体に縄文時代晩期の時期と考えられた。さらにこれらは、文様構成から東北地方南部の当該期の標識土器型式である岩手県大洞貝塚に類する大洞式段階と考えられ、晩期中葉の大洞C1式～C2式、同後葉の大洞A式頃のものとして判断された。

全体的には、最下層が大洞C1式～C2式、下層～中層がC2式、上層がC2式～A式頃と推測された。

これは、当地域の縄文時代終末期から弥生時代初頭への移行を考える上で、貴重な資料と考えられる。

一方、谷北側の岸辺（平場）では、岸から約10mは遺構が希薄だが、その北側に直径約1m前後の土坑が集中し、更に北側には建物を構成すると考えられる大型柱穴が確認されている。また、今調査区の北西を昭和54年に山形大学が調査した際に同時期の竪穴住居跡が確認されている。こうした遺跡分布から、集落の主体は今調査区の北側に存在し、南北約200mの大規模な集落だったと考えられる。また、多量の遺物が出土した谷跡は集落の南縁辺にあたり、その出土品の様相から廃棄場や祭祀場などに利用されたものと考えられる。

#### まとめ

今調査は、小規模な調査範囲であったが、調査区南側には深さ約1.5mの谷跡が発見され、堆積土の各層ごとに縄文時代晩期中～後葉の多量の土器や石器、多様な祭祀品、装飾品が出土した。これは、第1次調査の「捨て場」から発見された出土品とも時期的に合致し関連性がうかがえる。また、昨年度の第2次調査で発見された、県内では数少ない弥生時代初頭の土器群に繋がる時期のものでもある。今後これらを詳細に比較検討することで、県内及びその周辺地域の縄文時代終末から次代弥生時代へ移行する過渡期の様相を知ることができよう。特に今調査で出土した県内で数少ない新潟県糸魚川産のヒスイ製玉類は、本遺跡が当地域の求心力のある拠点集落で、縄文時代終末から他地域と積極的な交流が盛んであったことがうかがえる。これは、「米どころ山形」として知られる本県の稲作文化がどのような経路や経緯を辿って流入したかを考える上でも貴重な資料である。





SG1 谷跡の中層の縄文土器（渦巻状の文様の浅鉢）



SG1 谷跡の下層の縄文土器（突起のある大型皿の内側）



土偶の出土状況（胸部と両腕部。頭部欠損）



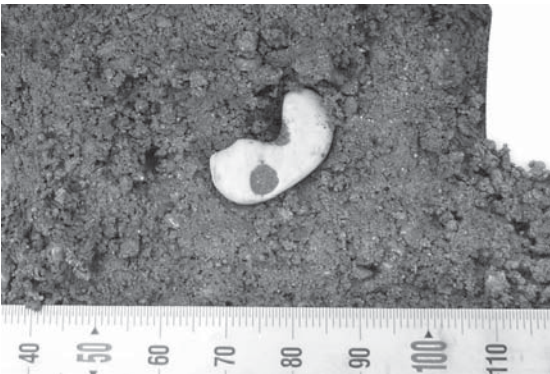
土冠（どかん）の出土状況



石刀（突起部がくびれる男性器を模倣した柄部）



石刀（突起部がくびれない柄部）



新潟県糸魚川産と考えられるヒスイ製の勾玉（まがたま）



新潟県糸魚川産のヒスイ製の玉